

寄稿

## 医療・福祉現場で働く

## 聞こえない人たちの

声

-4-

私は京都で看護師をしている北川千夜子と申します。中途失聴者です。15年間ほど「難聴は自分の欠点。補聴器は恥ずかしい」と隠してきました。次第に患者さんの声や息苦しそうな呼吸音、聴診器での音が聞き取りにくくなり、電話対応も苦痛となり、スタッフ同士の申し送りや口頭指示の聞き間違いや聞き洩らし等、仕事のミスが増えてきました。自分を責め、自信喪失、自尊心低下から、「看護師を辞めるしかない」とまで思い詰めるようになりました。

転機となったのは、手話と聴覚

障害者との出会いです。手話の魅力を知り、地元の同障害者との交流による居場所ができ、心が癒され、前向きな気持ちになりました。「聴覚障害を持つ医療従事者の会」に

手話と仲間とともに  
理解や支援の発信を

も入会し、医療現場での悩みが共感でき、情報保障支援等の現状、音声を視覚化するための工夫等、自分たちの力を発揮するために必要な情報交換をしています。

私は今、訪問看護で利用者のご

自宅へ一人で伺います。やはり音情報が入らず困る場面はありますが、「今の自分が必要としているのは努力なのか、助けなのか」を見極めるための判断をするようになってきています。

難聴は外見ではわかりづらいため、自分からその都度伝え、リアルタイムの内容をできるだけ聞き取るためにロジャー（補聴援助システム）を使用しています。私のような困難を抱えても、今の難聴レベルでは障害者に該当しません。従って、同システムを自費購入する等の苦勞があります。こうした様々な現状、聴覚障害への理解や支援を広めるためにも、当事者として積極的に発信していくことが大切だと感じています。